

30周年記念・夏休み自然観察記録コンクール

だて・すけしげ
1932年三笠市生まれ。
芸芸大学札幌分校卒業。
三笠市立教育研究所所員。
空知教育研修センターで植
物の講師を20年間務める。
栗山植物観察会顧問。

伊 達 佐 重

当協会が記念事業の一環として北海道新聞社、北海道新聞野生生物基金との共催、北海道教育委員会の後援を得て、「夏休み自然観察記録コンクール」を行ない、全道の小・中学生から作品を募集した。

課題は、小学生は「身のまわりの自然をよく見て作文や絵に詳しくかいてみよう」、中学生は「北海道の自然と私をテーマに作文」で、小学生百二十二点、中学生二十七点の応募があった。募集の案内は道新紙面の全道版に数回載せて頂いたことの効果が大きかった。当協会でも会報NCで紹介をし、道内の小・中学校の約二千四百校全部に封書で送るといふ大へんな作業を手分けして行った。

○審査には次の方々が当たった。

依 浩三(道自然保護協会会長)
佐藤 謙(同 副会長)
鮫島惇一郎(自然環境研究室主宰)
三浦 二郎(樽前自然教育研究所主宰)
伊達 佐重(道自然保護協会常務理事)
福地 郁子(同)
布施 俊幸(道新野生生物基金事務局長)

○入賞者は次の通りである。

小学生 (★は絵の作品)

金賞 中嶋 亮太(函館市・深堀小六年)
銀賞 松井 七奈(同・桔梗小六年)
井上 直輝(札幌市・緑丘小三年)
銅賞 辻 純子(同・白楊小四年) ★
山内 夏末(十勝音更町・音更小三年)
稲葉 智美(函館市・柏野小二年) ★

佳作

川辺 聡美(札幌市・西園小六年)
川辺 真樹(十勝上士幌町・糠平小六年)
島田 一之(函館市・柏野小六年) ★
星川 苗菜(釧路釧路町・遠矢小五年)
高橋 慶多(釧路市・昭和小五年)
高橋 賢司(札幌市・北光小四年)
齊藤 麻耶(釧路市・共栄小四年) ★
濱 倫子(同・新陽小四年)
田中 彩(函館市・高丘小四年)
坂 尚憲(札幌市・緑丘小一年)

中学生

金賞 武岡理恵子(石狩当別町・西当別中三年)
銀賞 藤島美恵子(檜山江差町・日明中二年)
中村健志郎(伊達市・伊達中一年)
橋本 愛美(釧路市・大栗毛中二年)
若木まりも(同・東中一年)
真如 晃人(網走佐呂間町・浜佐呂間中一年)
佳作 江口 絵美(上川剣淵町・剣淵中三年)
堀田麻由子(檜山江差町・日明中三年)
須藤 浩一(同・同)
郷野 亜希(根室標津町・標津中三年)
宮腰 理恵(十勝鹿追町・鹿追中二年)

入賞者及び優秀作品の発表を九月二十八日の道新紙上で行った上、在学する小・中学校へ名簿、賞状、副賞(図書券)メダルを送った。あわせて学校長に対し、全校生に朝会や放送などの場を利用して伝達の間を持って頂きたいとの依頼文を送付した。

また、応募作品の中から数点の絵を会報NCに掲載して会員に紹介した。

審査を終えて

道内の小・中学校は約二千四百です。その全校に案内書を発送する手間は大変でした。作業をしながら願ったのは、学校で開封後に綴(と)じ込みに眠ってしまったわかないで、全校生に周知してほしいことでした。北海道新聞の告知で数回のせていただいた効果もあって、締切日には八十四校から百四十九人の応募者がありました。

送られた作品は、七人の審査員が二度にわたって慎重に詳しく内容を審査いたしました。

小学校では、一、二年生は絵日記の形をとったものが多く、大胆に描かれた絵にきちんとした文字で文を書いていました。三、四年生は五十点の出品で、写真を利用したり、本を淡く複製してスケッチ力の不足を補ったりという工夫も見られました。しかし、自分の力以外の要素が加わった分だけ、手作りで仕上げた作品の迫力に負けて選外になった人もいます。「虫のかんさつ」で目あてを決め、計画をたてて観察を続け、スケッチの線を何度も書き直した跡が見られる井上直輝君の作品が光りました。中にはクモの足が六本という絵

<資料1>

	学年	応募者数	入選者数
小学校	1年	22	1
	2年	15	1
	3年	29	2
	4年	21	5
	5年	11	2
	計	122	16
中学校	1年	14	3
	2年	8	3
	3年	5	5
合計	149	27	

<資料2>

道内の小・中学校数	小学校	中学校	合計
	1,627	771	2,398

(1994年7月現在)

の人もいたことをつけ加えておきます。

五、六年生の作品は力作が肩を並べ、順位を決めるまでかなりの時間がかかりました。結局、細かい観察でオサムシとカタツムリの変化の様子を見続けた中嶋亮太君に軍配が上がったのです。

中学では、「北海道の自然と私」という広がりがあるものややばく然とした課題が多少災いしたのか、具体的な現状を離れ、頭の中だけで考え

夏休み自然観察記録 コンクール

北海道自然保護協会の創立30周年、北海道新聞野生生物基金の創立2周年を記念し「夏休み自然観察記録」の作品を募集します。多数の応募をお待ちしています。

- テーマ/小学生 身のまわりの自然をよく見て、作文や絵に詳しく書いてみよう。
中学生 「北海道の自然と私」を作文にまとめる。
- 応募資格/道内に在住する小・中学生。
- 応募規定/小学生の作文は自由な規模。小学校低学年は絵日記ふうなまめ方でもよい。絵は両面、用紙、大きさ自由。応募の例として (1)作文だけ (2)作文と絵 (3)絵だけなど自由。
中学生は400字詰の原簿用紙3枚程度に書き、二つ折りにして送む。
●応募票(形式自由)は作文(表)にも絵(裏)にも一枚だけに限る。
(題、住所、氏名、学校名、学年を明記して下さい)
●作文はページ番号、絵には題字を示す月・日や番号を入れる。
- 応募先/〒060札幌市中央区北3条西11丁目加茂ビル5F
北海道自然保護協会 ☎011-251-5405
- 締め切り/1994年9月5日00時(郵送可持参)
- 入賞者の発表/9月下旬までに北海道新聞紙上で入賞者を発表し、本人または在学する小・中学校へ名簿を発送します。
- その他/応募作品は返却しません。優秀作品は北海道新聞および自然保護協会の広報紙などに掲載します。

主催/北海道自然保護協会、北海道新聞社、
北海道新聞野生生物基金
副後援/北海道教育委員会

- 賞
- | | |
|--------------------------------|--|
| 小学生の部/金賞1名(賞状、メダル、図書券 7,000円) | |
| 銀賞2名(賞状、メダル、図書券 5,000円) | |
| 銅賞3名(賞状、メダル、図書券 3,000円) | |
| 佳作10名(賞状、メダル、図書券 1,000円) | |
| 中学生の部/金賞1名(賞状、メダル、図書券 10,000円) | |
| 銀賞2名(賞状、メダル、図書券 7,000円) | |
| 銅賞3名(賞状、メダル、図書券 5,000円) | |
| 佳作5名(賞状、メダル、図書券 3,000円) | |



たものを羅列した文が大部分でした。そんな中で、自分の住む町を中心にすえて身近な所から筆を進めた三人が金銀賞に入りました。

終わりに今回の募集に当たり、児童・生徒に対する事前事後の指導にお力添えを下された教職員各位、ならびに父母の方々に心からお礼を申し上げます。

(一九九四年九月二八日付の道新より転載)

優秀作品紹介

小学生の部

金賞

オサムシの観察

函館市立深堀小六年 中嶋 亮太

友達と自然観察をするために近くの山へ行った。そこで、みぞにオサムシが落ちていたので観察した。

オサムシの名前はエゾマイマイカブリで、オサムシはみぞからはい上がりとうとするが、みぞの角度が急でなかなか登れない。

しばらくして、登るのをあきらめたオサムシは、ヒョコヒョコ長い足で歩き回る。しょっかくを前の方に長く伸ばしてパタパタさせている。まるで地雷を探しながら進む軍用トラックみたいだ。

少し歩いたところで、やはりみぞに落ちていた大きなカタツムリに出会った。出会ったと同時にオサムシは、カタツムリにおそいかかった。遠くから生きものを見つけて狩をするオオカミやライオンと違って、エサをねらっておそうという感じではない。

オサムシは、カタツムリの頭にかみついた。かみつかれたカタツムリは、スーっと頭をカラの中に引っこめると同時に、あわをブクブク出しはじめた。オサムシは足であわをよけるようにして、必死にカタツムリにくわえついている。

カタツムリは負けずに、あわをブクブク出し続ける。そのうちに、オサムシの頭は、あわの中に

すっぽりうもれてしまい、背中の上の部分まであわだらけで、僕は、呼吸をどうしているのか、オサムシがちっ息してしまうのではないかと心配になった。それでもオサムシは、カタツムリをはなそうとしない。

しばらくして、とつ然、オサムシがカタツムリからはなれた。オサムシの手や足や頭、背中の半分くらいまで、あわがついている。オサムシは、休むことなどしないで、二本の前足でしょっかくについたあわや顔についているネバネバを一生懸命とりはじめた。オサムシは、ネバネバがいやでカタツムリからはなれたのだと僕は思った。

僕は、カタツムリは敵から攻撃されると、体もカラの中にかくして身を守るものだと思っていた。ところが、カタツムリは敵の攻撃にあわを出して戦った。このあわの中には毒になるようなものは入っていないらしい。それは、オサムシが弱る様子がなかったことと、あわをとったオサムシが、再び攻撃をはじめたこととわかった。

ネバネバをとり終ったオサムシは、あたりの様子やうかがい、カタツムリを見つけると、再び攻撃を始めた。

そして、三度目の攻撃で、やっとカタツムリは動かなくなり、オサムシはカタツムリのカラの中に首を入れて食べはじめた。

僕は、観察をしている途中で、何度かカタツムリの味方をしようとした。でも、必死に攻撃をするオサムシを見てやめた。

僕は、この観察をして、人間が、「かわいそう」という心で、自然のどちらかに味方することはよくないことだと思った。

銀賞

ナミアゲハの観察

函館市立桔梗小六年 松井 七奈

私の家のまわりによくナミアゲハが飛んで来ます。私の家の庭には、ナミアゲハの幼虫の食べるサンショウは植えられていません。家に来るおねえちゃんに話をしたら、「きつと近所に、サンショウがあるんだよ。」って教えてくれました。

おねえちゃんと妹の里沙と三人で、家のまわりを探して歩くと、すぐ近くの家の庭に、サンショウの木がありました。そして、ブクブク太ったナミアゲハの幼虫がっていました。その家の人に話をしたら、「家では気持悪いので、葉まいているんだよ。」って話してくれました。おねえちゃんが、「幼虫もらっていいですか。」って聞いたら、「どうぞどうぞ。」とニコニコしながら、いってくれました。

私は、そこで三びきの幼虫をとって、家で飼育することにしました。

幼虫は、元氣良くサンショウの葉を食べます。手で葉をたてにおさえて、口の所にある歯で、まるで、カミソリで紙を切るように上手にサクサクと食べていきます。頭を上下に動かして、とてもおいしそうに食べます。一まいが終ると、また別の葉をおさえて、同じようにして食べます。

幼虫を手でつまんでみました。ふわっとした赤ちゃんのほっぺのようにやわらかい体です。とる時にはすぐにとれませんが、幼虫のいた木の所に白い糸がたくさんありました。きつと、風で飛ばされないように、足をひっかけていたのだと思います。

す。

幼虫をつかもうとした時、頭からオレンジ色の角のようなものを出しました。プーンと、みかんをむいた時のようなにおいがしました。

足は、上の方に小さな足が六本あって、これで葉をおさえていました。その小さな足の下には、きゅうばんのような足がついていて、それで枝にしっかりとつかまっていたのです。

二日後、アゲハの幼虫は、枝にいたまま動かなくなりました。そして体が小さくなり色も茶色っぽくなりました。そして二日後、みるとさなぎになっていました。

さなぎは、幼虫のように動くことはありません。じっと静かにしていますが、きりふきで水をかけると、体をクネクネさせてゆれます。胸の糸が切れないかと心配でした。手で静かにさわっても、同じように動きます。

さなぎは色が木の枝と似ているので、それだけで身を守っているのだと思いました。

さなぎに毎日きりふきをして様子をみていたら五日目くらいで、さなぎに変化が出てきました。さなぎの色が変わってきたのです。

さなぎの胸の部分に、チョウの羽の形がすけて出てきました。そして体の部分も黒くなっています。

次の日みると、アゲハチョウがさなぎにとまって、羽を開いたり閉じたりしていました。

銀賞

虫のかんさつ

札幌市立緑丘小三年 井上 直輝

しらべた虫	7月27日	マンションの中
カミキリムシ	7月25日	西おか
ヘイケボタル	7月28日	いわみざわ
トノサマバッタ	8月10日	いわみざわ
アキアカネ	8月10日	いわみざわ
モンシロチョウ	8月10日	いわみざわ
モンキチョウ	8月13日	大沼プリンスホテル
センチコガネ		

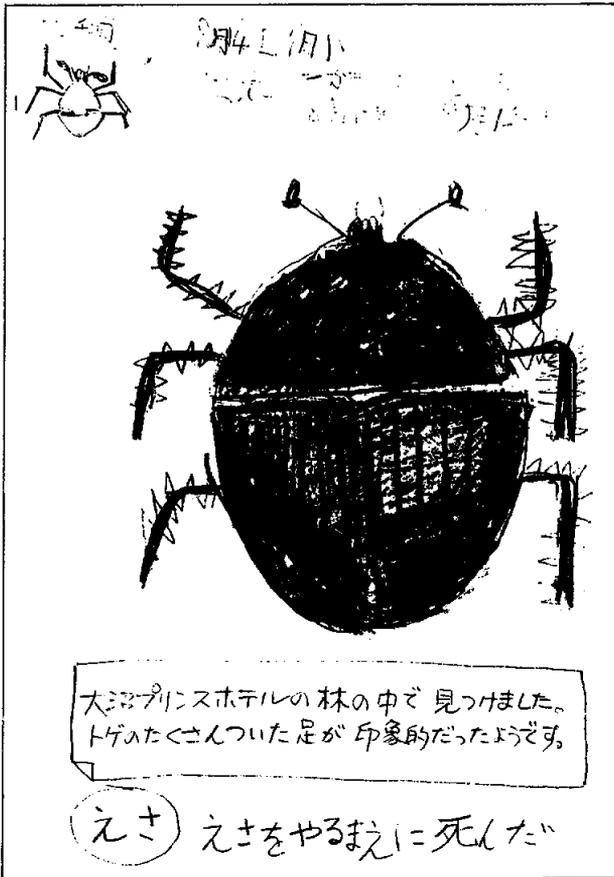
かんそう

一、いろんなかたちの虫がいることがわかった。

二、たべものをもって工夫してやれば、長生きしたと思う。

(絵日記の

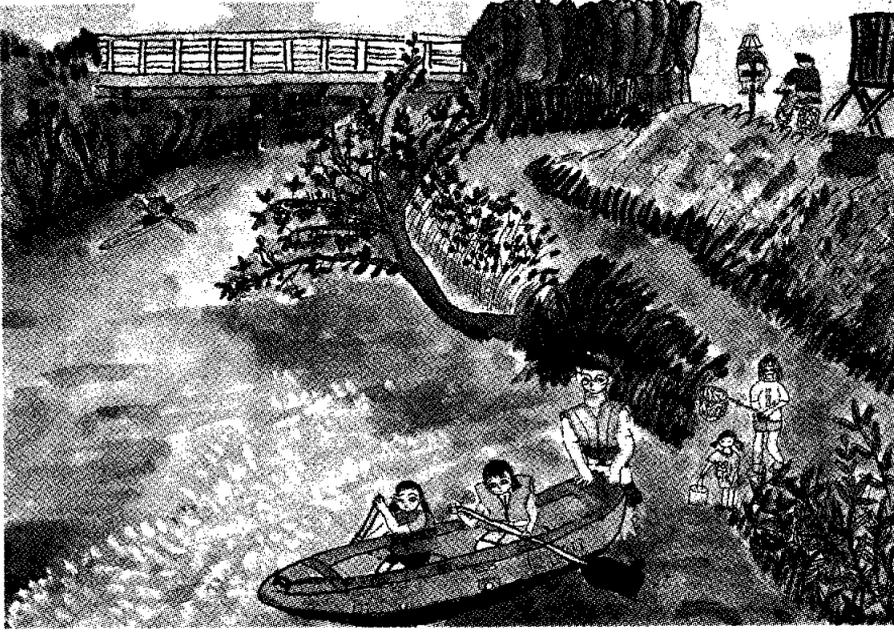
一部抜粋)



銅賞 (絵の部のみ)

ちとせ川のふうけい

札幌市立白楊小学校四年 辻 純子



みじかな草花

函館市立柏野小学校二年 稲葉智美



私の大好きな町

当別町立西当別中三年 武岡理恵子

私の住む当別町の太美という所は、ここ数年、人口が急激に増えています。

私が小学校を卒業した時は、全校児童が百二十人位でした。その時分私は他校の人から「西当別中ってどこにあるの。」

「何クラス？」

などと聞かれるのが、とてもいやでした。なぜなら、「一学年一学級」と答えると、とても不思議そうな顔をされたからです。

しかし、そんな私の気持ちを通じたのか住宅がどんどん建ち、街並みはすっかり変わっていききました。二十四時間営業のコンビニエンスストアや薬局ができたり、新しく開通した札幌大橋のおかげで大型スーパーやデパートにも行きやすくなったなど、毎日の暮らしはとても便利になりました。道を歩いていても知らない人が増え、田舎だったところがだんだんと都会になってきたような気がして私はとてもうれしく思っていました。

ところがよく考えてみると、困った事実もあるのだということに気が付きました。昔父と一緒にワラビ採りに行った野原は宅地用に整地され、友達と釣りを楽しんだ用水路は、コンクリートの溝に姿を変え、さらに防護柵までついて人が近寄る事もできなくなっていました。夏のむし暑い夜に外に出るとうるさい位に鳴いていたカエルの声も、今年の夏は全く聞くことができませんでした。魚

を釣ったり、虫をつかまえたりすることが人間の成長にどんな影響を与えるのか、私にはよくわかりません。家の回りの様子がどんどん変わったり、昔ながらの自然が少なくなっていくのが、とても気がかりです。たしかに団地の中には公園があり、そこには芝がはられ、木も整然と植えられています。築山や砂場まであります。人工の自然がちやんと用意されています。それはそれでいいのですが昔ながらの天然の自然をもっと大事にした町が作られたらいいのになと思います。

自動車で十分程の所にある石狩川のほとりには沢山の種類の野鳥がやってくるの聞きました。近くの防風林に行くと、まだ桑の実や山ブドウを採ることもできます。二階の私の部屋から見ることができる夕日だってまだ家がそんなに建て込んでいないのでとてもきれいです。

学校では毎年全校生徒が通学路沿いの空き缶拾いをしています。野鳥が私の家の庭にも沢山きてくれるようにと、夏休みにバードテーブルも作りました。自然を大事にする為に私がしたことはほんの少しですが、太美に今住んでいる人も、これから引越しをして新たに住人になる人も、みんなが気持ちよく暮らせる町になってくれるよう心の中で願っています。そして私でも何かできる事がありそうな時は一生懸命、頑張りたいと思っています。

有珠山を巡検して

伊達市立伊達中一年 中村健志郎

八月八日(月)伊達市立伊達中学校科学クラブ一同は、噴火後、十七年経過した有珠山への巡検を実施した。

この巡検で有珠山噴火のすごさや、その後の自然の回復ぶり、ゴミ問題についてなどの貴重な体験をすることができた。

今年の夏は去年に比べ、非常に暑い。巡検は生まれて初めてで経験不足もあり、軽い気持ちで参加したがそれは大きなまちがいで、いい教訓となった。というのは、有珠駅出発朝八時からその後七時間、暑い中を水筒一本で過ごしたからである。この時ほど水の大切さが身に感じたことはなかった。

外輪山の展望台まで歩き、約四十分ほど有珠山について学習をした。学習内容は「マグマについて」、「洞爺カルデラと有珠噴火の歴史」、「有珠山の岩石」、「有珠山の動植物」、「自然保護、防災」などだ。その中でも今回の巡検の重点目的は有珠山銀沼火口原の動物にしばらく。この点をみんなで確認し、展望台をあとにした。まず北屏風山での噴火地点でめずらしいと思われる白い粉を採取した。帰校後、この粉の成分を調べた所、酸性であり、わずかな硫黄を含んでいたがそれ以上のことはわからなかった。この殺伐たる風景の中に、ひとときわ目立つ赤紫色のネジバナを見つけ、一同心が和らいだ。

途中、昼食をとり昼食後、第四火口へ向かった。

第四火口は木がうっそうと茂り、とても火口には思えない光景だった。この噴火口が現在より温泉側にずれていたら、大被害をこうむっていただろう。今は静まりかえった火口も防災ダムが築かれていることから、この火口の重要性がうかがえる。

そして、最後に最終目的の銀沼火口原へ向かい、ここで僕たちにとっては一生の思い出に残る、驚くべき発見をした。水もつきはて、つかれきり、もう帰ろうという気持ちもあったが、残る気力をふりしぼりカメラと採集用具のみを持って降りていった。事前学習で火口原にはクモ、アリ、ハエ、しかないとい記されていたが、新種の生物を見つけたい思いで六人のクラブ員は地面ばかり見て降りていった。十分ほどして一人が倒れた朽木を足で動かすと、もう一人が「あっとカゲだ!!」と叫んだ。まったく予想していない言葉に他の四人は色めきたち、その朽木のまわりに集まった。捕獲作戦は見事成功しトカゲを捕まえることができた。このトカゲを写真に収め、後日図書館で調べた所ニホントカゲの幼生であることが判明し、この地域には確実にハ虫類が生き延びていることがわかった。このトカゲの発見で元氣を取りもどし、通称ペンジョコオロギ、トノサマバッタ、ワラジムシなどや多足類の多くを見つけ、北海道大学の研究グループがセットした器材をめざしがり、最後に銀沼火口を全員でのぞき、自然の驚異を肌身で感じる事ができた。

今後の僕たちの課題として、来年また今年以上の詳しい調査の必要性を感じた。それはあのトカゲを中心とした生態系がこれからどうなるのか、粘り強く調査したいものだ、この巡検を終え、今でも僕は思っている。

銀 賞

北海道地震と自然

江差町立日明中二年 藤島美恵子

一九九三年七月十三日、十時十七分その地震が北海道に雨のようにふってきました。今までの平和が地震のせいで消えていってしまいました。マグニチュード七・八の大きな地震でした。

私は、その時ねていました。ぐっすりねていると、急に揺れだしました。でも、そんなに最初は気になるほどではなかったのですね。だんだん激しくなりとても怖かったです。私は、このとき最初に思ったのはみんなのことでした。「みんな大丈夫かな。ケガとかしてないよね。」と

思っていました。すると地震はおさまり、ほっとしている間もなく、お父さんが、「津波が来る。」と言っていて、ラジオも言っていました。一回高台へひなんしました。お父さんたちは、「津波を見に行く。」と言って行ってしまい、私はずっと震えが止まりませんでした。お父さんたちはもどってきて「津波がガソリンスタンドをまるのみした。」と言いました。怖くて怖くて涙が出るほどでした。死んでしまうのかと思うほどでした。

一度帰ってきて、荷物をつめてまた高台へ行きました。すると一台のヘリコプターが海の方へ向

かっていったのできつと奥尻だともい、そうがんきょうで見たら、赤い炎がたくさん見えました。これで死んでいってしまう人が増えてしまう。地震を止めたいと思っても自然には、さからえないと思えました。家に帰りました地震がおこるかもしれないと思、みんなで固まってねました。

次の日、テレビを見ていたら、奥尻が入っていました。家もなにかもが燃えていました。

また、この南西沖地震のような地震がおきるのだろうか。また悲しいことがあるのだろうか。こういうことが多くおこったら、北海道はどうなるのだろうか。米ができなくなったり、野菜ができなかったり、魚とかいなくなったりするのだろうか。地震のおきる前は、ほんとうに、平和で食べ物も豊かだったのに地震がおきたら、すこくあつくなくなり、水不足になったり、大変になってきてしまいました。

うわさでは、大島が噴火したら、江差町がつぶれてしまうという。にげる場所もない、火山ばいが空を通ってきたり、マグマが海を通ってきたりすると言ってきました。この北海道の未来はどうなっているのだろうか。いつの間にか、なくなっているのかも知れない。

私が北海道の自然を初めて考えるようになったのは、やっぱり地震がおきてからです。私たちが北海道と一緒に消えてしまうのだろうか。雪のように、地面に落ちて、とけてなくなるのだろうか。私は、それまで明るくすごしたいです。いつもの私とちがう私になって、この私の生まれた北海道とともに。この自然を、守りながら明るくすごしていきたいです。